

遺作を展示した（『青木繁・坂本繁二郎とその友』竹藤寛。昭和六十一年。福岡ユネスコ協会。ほか）。この年の秋には齊藤与里、萬鉄五郎らのフューザン会と川路柳虹、伊藤順三らの行樹社がともに第一回展を開いており、その両方のメンバーがこの「アブサント洋画展」に出品したようだ。その後の消息は不明である。

なお、アブサント同人たちが発行を計画していたという『卓上』（50頁『読売新聞』記事参照）について言うと、これと同名の雑誌を美術店田中屋の田中喜作と川路柳虹が大正三年四月から約一年間発行している。その間に何らかの関連がありそうだ。田中らの『卓上』は毎号富本憲吉の木版画を表紙に用い、田中、川路、梅原龍三郎、齊藤与里、岸田劉生、石井柏亭といった新進批評家、作家たちが執筆している注目すべき小美術雑誌である。これについては復刻版『卓上』（平成二年。京都書院）の別冊「解説・総目次」に懇切な解説（熊田司著）がある。

### ⑮ 創立記念式と朝倉文夫の講話

明治四十四年十月四日、新築講堂で恒例の創立記念式が行われ、朝倉文夫の南洋見聞談講話があった。正木直彦は『十三松堂日記』に、

十月四日 水曜日 雨 美術學校創立二十三年目の記念日なり  
新講堂に於て紀念會を開く 余か式辭の後に近ころ南洋ポルネオより歸朝せる朝倉文夫將來物を示して旅行談をなす ベルナイ土人の銅器各種は其雅趣云ふへからざるものあり 其製作も亦薄手

にして技巧の妙を見る 餘興として橘流筑前琵琶 松林伯知の講談あり

と記されており、また、

十月二十四日 火曜日 晴 朝倉文夫來訪 同氏ポルネオブルナイより將來したる古銅タンパッションレを學校參考品として購入のことを決定す〔下略〕

ともある。

朝倉は実兄渡辺長男が井上馨銅像製作を受託した際にその原型製作を担当したが、製作中に友人から南洋探検隊参加に誘われ、井上馨の援助を受けて明治四十四年二月二日に出発。ポルネオ、シंगाポール、ジュバン、ジマシャ等に滞在して同年九月二十七日に帰国した。『東京美術学校校友会月報』第十卷第四号には右の創立記念日における講話の筆記を多少布衍した内容の「南洋の話」と朝倉が持ち帰った工艺品および南洋風俗の写真が掲載されている。